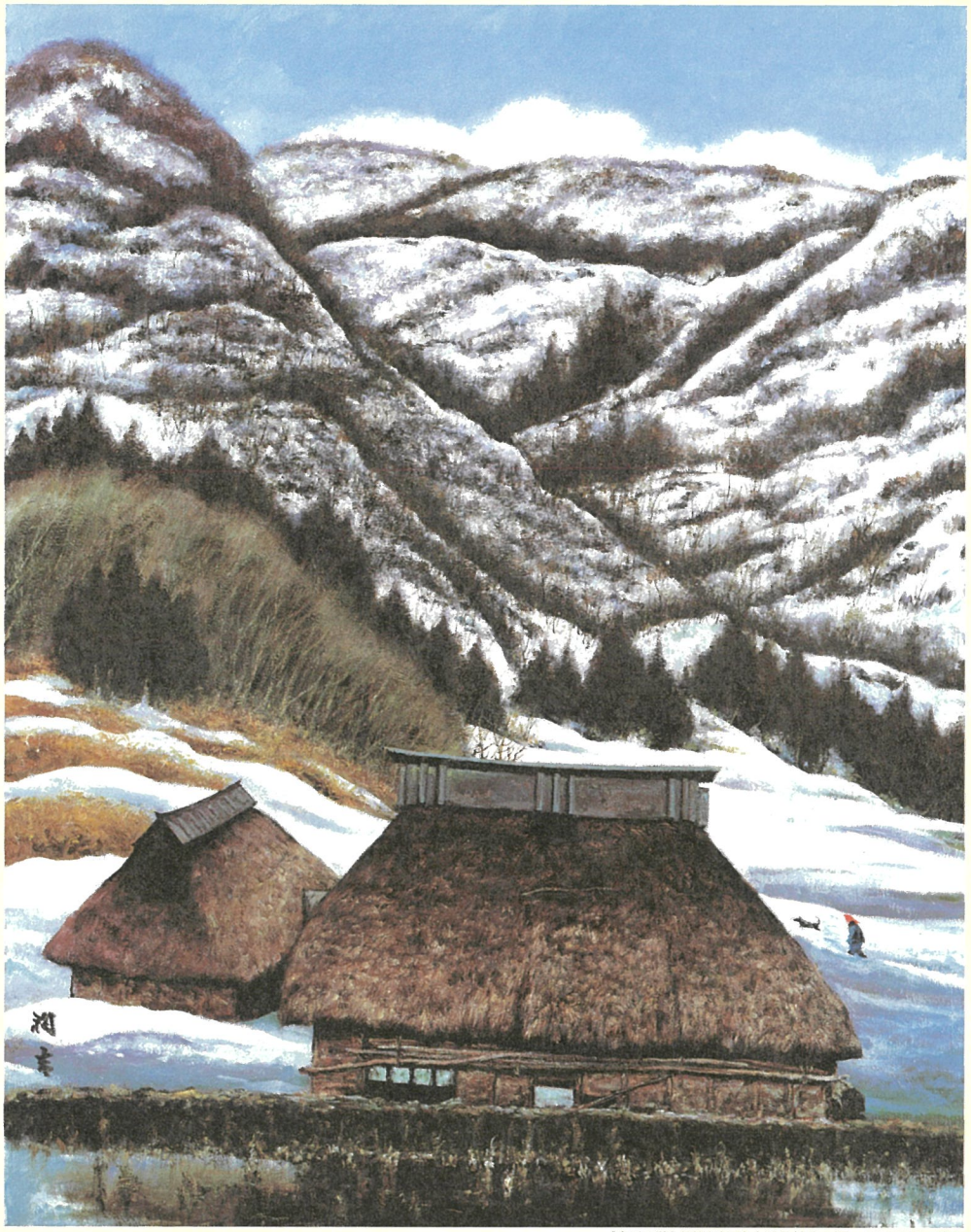


《宿雪の狭》(長野県下水内群栄村秋山郷)　1983(昭和58)年

向井 潤吉

生きている民家

―描かれた生活の息吹―

2008年12月6日[土]
⇓
2009年3月22日[日]

世田谷美術館分館 向井潤吉アトリエ館

◆開館時間／ 10:00～18:00(入館は17:30まで)◆休館日／毎週月曜日(ただし休日と重なった場合は翌日)、年末年始(12月29日～1月3日)◆観覧料／一般200円(160円)、大高生150円(120円)、中小生100円(80円)、65歳以上及び障害者の方100円(80円)※(　)内は20名以上の団体料金。小・中学生は土・日・祝日無料。※障害者で小・中・高・大学生、および障害者の介護者(当該障害者一人につき、一人に限る)は無料。

向井 潤吉

生きている民家

― 描かれた生活の息吹 ―

母屋からL字型に突き出した厩（うまや）をもつ「曲屋（まがりや）」、厳しい冬の風雪に耐える「カッチョ」（防風柵）、養蚕を営む人々の「かぶと造り」とよばれる多層民家―。こうした様々な民家のかたちは、風土とともに生きる人々の、生活の知恵が生み出した造形だといえるでしょう。

失われゆく民家の姿を追いつづけた画家・向井潤吉（1901-1995）。彼の作品は、懐古趣味でなく、また情緒的でもない、的確なリアリストの眼が描き出した絵画です。そこには、古くから伝わる生活の“かたち”が、克明に記録されています。

私の民家を扱う気持にも徐々と変移があった。（中略）
家を大切にしながらも、
その家をとり囲む風土風景を主とするようになってきたのである。

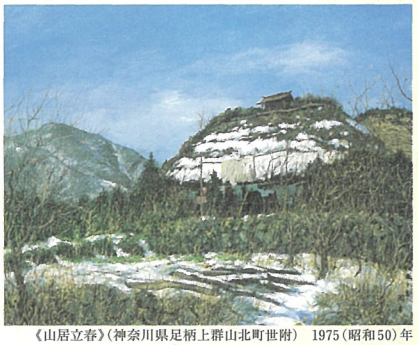
『中央公論』1967年12月号

このように述べる向井は、あくまで草葺屋根の民家を主眼としつつ、周囲の自然環境までを視野に入れた作品づくりを進めていきました。自然に抱かれるようにひっそりと佇む民家の風景からは、人々のつつましい暮らしの気配がひしひしと伝わってくるようです。

移りゆく時代の空気をつぶさに感じ続けた、画家・向井潤吉が作品に描き残そうとしたのは、まさにあたたかい生命（いのち）が通った「生きている民家」の姿だったといえるでしょう。

本展を通じ、民家の「生きている」姿から、それぞれの風土の中で脈々と営まれてきた人々の生活の息づかいを、読みとっていただければと思います。

《風と砂の村》（青森県北津軽郡市浦村十三）　1964（昭和39）年



《山居立春》（神奈川県足柄上群山北町世附）　1975（昭和50）年

《北端の村》（青森県下北郡東通村尻屋）　1962（昭和37）年

《奥多摩の秋》（東京都奥多摩郡奥多摩町）　1975（昭和50）年

本館情報

世田谷美術館
〒157-0075 東京都世田谷区砧公園1-2　TEL 03(3415)6011

企画展　『山口薫展 都市と田園のはざまで』
2008年11月3日（月祝）→ 12月23日（火祝）

『十二の旅：感性と経験のイギリス美術』
2009年1月10日（土）→ 3月1日（日）

特別展『平泉～みちのくの浄土～』
2009年3月14日（土）→ 4月19日（日）

収蔵品展『難波田史男展』
2008年12月12日（金）→ 2009年2月27日（金）

分館情報

会期：2008年12月6日（土）→2009年3月22日（日）

清川泰次記念ギャラリー
〒157-0066 世田谷区成城2-22-17
TEL 03(3416)1202　www.kiyokawataiji-annex.jp
『旅とカメラ――清川泰次が写した昭和日本紀行』

宮本三郎記念美術館
〒158-0083 東京都世田谷区奥沢5-38-13
TEL 03(5483)3836　www.miyamotosaburo-annex.jp
『画家の書棚にみる 昭和のアートブック史
――宮本三郎文庫より』

以下の表記を、次のとおり訂正いたします。
表面作品タイトル　正：《宿雪の峠》（長野県下水内郡栄村秋山郷）
裏面作品タイトル　正：《山居立春》（神奈川県足柄上郡山北町世附）

世田谷美術館分館
向井潤吉アトリエ館
〒154-0016 東京都世田谷区弦巻2-5-1 TEL 03-5450-9581

www.mukaijunkichi-annex.jp　交通⇒東急田園都市線「駒沢大学」駅　西口徒歩10分／東急世田谷線「松陰神社前」駅　徒歩17分／東急バス（渋05）渋谷～弦巻営業所「駒沢中学校」徒歩3分／東急バス（等11）祖師谷折返所～等々力「駒沢三丁目」徒歩3分／東急バス（渋11）渋谷～田園調布「駒沢大学駅前」徒歩10分／東急バス（渋12）渋谷～二子玉川「駒沢大学駅前」徒歩10分